

古文ドリル：敬語の訳し方 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） **著作権：**個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：敬語の訳し方ルール

古文の敬語は **現代語訳に正確に反映** させる必要がある。

敬語の種類	訳の形
尊敬語	お～になる／～なさる
謙譲語	お～する／～申し上げる／～いたす
丁寧語	～です／～ます／～ございます

訳し方の鉄則

尊敬語（動作主への敬意）

- 給ふ（四段） → ～なさる／お～になる
- おはす／おはします → いらっしゃる
- 仰す／のたまふ → おっしゃる
- 召す → お召しになる／お呼びになる
- 御覧ず → ご覧になる
- 大殿籠る → お休みになる
- 思す／思しめす → お思いになる
- きこしめす → お聞きになる／召し上がる
- あそばす → なさる（高貴な人の動作）
- 遣はす → 派遣なさる

謙譲語（動作の受け手への敬意）

- 奉る → 差し上げる
- 参る → 参上する／差し上げる
- 申す／聞こゆ → 申し上げる
- 仕うまつる／つかうまつる → お仕えする（「す」の謙譲で「いたす」とも）

- ・ 賜ふ（下二段） → いただく
- ・ 承る → お受けする／伺う
- ・ まかる／まかづ → 退出する（「まかる」は「(地方へ) 下る」の意も。「参上する」と訳すのは「参る・まうづ」)
- ・ まうづ → 参上する（寺社なら参詣する）
- ・ 侍り／候ふ（さぶらふ）（本動詞で「貴人のそばにいる」意） → お仕えする／お控えする

丁寧語（聞き手・読み手への敬意）

- ・ 侍り → ～ございます／～です／～ます
- ・ 候ふ／さぶらふ → ～ございます／～です／～ます

二重敬語（最高敬語）

形	訳
せたまふ／させたまふ	お～になる／～なさる
しめたまふ	お～なさる
仰せらる	おっしゃる
思しめす	お思いになる

→ 二重敬語は **天皇・皇族・摂関級** への最高敬意（地の文の場合。会話文では、話し手が目上の相手に使うこともある）。ただし「せ・させ」は使役のこともある（下のコツ②）。

動詞別・尊敬/謙譲両用注意

動詞	尊敬	謙譲
奉る	召し上がる／お召しになる／お乗りになる	差し上げる
参る	召し上がる（食事）	参上する／差し上げる
賜ふ	四段＝お与えになる（尊敬）	下二段＝いただく（謙譲）
給ふ	四段＝～なさる（尊敬）	下二段＝～ております・～させていただく（謙譲・会話文や手紙のみ）

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「訳し方の鉄則」は、敬語を訳すときの基本の決まり。

こちらは **試験本番ですばやく答えを出す** ための実戦テクニックです。

コツ① 敬語動詞の 直訳パターン を丸暗記（語数限定なので最強）

入試で出るのは決まった敬語動詞だけ。まず **形と訳の対応** を覚える（「奉る」「参る」「給ふ」「侍り・候ふ」のように訳が分かれる語は、下のコツ③④と「よくある引っ掛け」で見分ける）： - 「のたまふ／仰す」→ おっしゃる - 「おはす／おはします」→ いらっしゃる - 「思す／思しめす」→ お思いになる - 「御覧ず」→ ご覧になる - 「奉る」→ 差し上げる（謙譲）／お召しになる（尊敬） - 「申す／聞こゆ」→ 申し上げる - 「侍り／候ふ」→ ～です・～ます

コツ② 「せたまふ・させたまふ」は、まず使役か尊敬かを確かめる

「せたまふ／させたまふ／しめたまふ」を見たら： - 「～に」「～をして」など、**その動作をさせられる人** が書いてあれば **使役＋尊敬**（「～させなさる」）。例：「人々に歌よませたまふ」＝人々に歌を詠ませなさる - させられる人がいなければ **尊敬＋尊敬（二重敬語）**。訳は「お～になる／～なさる」（ただの尊敬と同じ訳でよい）。地の文では、動作主は天皇・中宮など最高位の人が多い - 「御覽ぜさせたまふ」は「（貴人に）お見せになる」（使役）になるのがふつう

コツ③ 「給ふ」の活用で訳が分岐（最頻出）

- ・ **四段の「給ふ」** → 尊敬「～なさる」
- ・ **下二段の「給ふ」** → 謙譲「～ております／～させていただく」（会話・手紙の中で、話し手自身の「思ふ・見る・聞く・知る」に付く時のみ。「～申し上げる」とは訳さない）

例：「見**給ふる**」（下二段連体形）→ 「見ております」。四段か下二段かは形で見分ける（下二段は「たまへ・たまへ・たまふ・たまふる・たまふれ」と活用する。「たまへず」「たまへし」なら下二段、「たまはず」「たまひし」なら四段。「たまへる」「たまへど」は四段（已然形に「り」「ど」が付いた形）なので、「たまへ」だけで下二段と決めない）

コツ④ 「奉る」「参る」は その人自身が食べる・飲む・着る・乗る ときだけ尊敬

- ・ 貴人が自分で「御酒を奉る」「御衣を奉る」「御車に奉る」→ 「召し上がる／お召しになる／お乗りになる」（尊敬）
- ・ 貴人が自分で「参る」＋飲食物 → 「召し上がる」（尊敬）
- ・ 人に差し上げる・人のもとへ行くときの「奉る／参る」→ 謙譲（差し上げる／参上する）。「酒を奉る」でも、人に差し上げるのなら謙譲

試験本番でのチェック順序

1. 敬語動詞を特定し、**暗記した訳語** を当てはめる
 2. 「給ふ」なら **活用形** で四段（尊敬）／下二段（謙譲）を判別
 3. 「奉る・参る」なら **動作の内容** で尊敬／謙譲を判別
 4. 「せたまふ」系は、させられる人（～に・～をして）がいれば使役＋尊敬「～させなさる」、いなければ最高敬語（二重敬語）で「お～になる／～なさる」
 5. 補助動詞の場合は「お～になる／お～申し上げる／～です・～ます」の形で接続
- この順番で見れば、**すばやく** 答えが出せます。

よくある引っかけ

- 補助動詞の「給ふ」を「与える」と訳す → 補助動詞は「～なさる」（下二段なら「～ております」）
- 「申す」を「言う」と訳す → 必ず「申し上げる」（謙譲を反映）
- 「侍り」を「いる」と訳す → 補助なら「～です・～ます」、本動詞でも「お仕えする／ございます」
- 二重敬語を訳に反映できない → 「お～になる」「～なさる」と尊敬の形を明示
- 「せ・させ」を全部尊敬と決めつける → させられる人（～に）がいれば使役で「～させなさる」

採点表

- 基礎（Q1～Q20）： /20
- 標準（Q21～Q50）： /30
- 応用（Q51～Q80）： /30
- 入試レベル（Q81～Q100）： /20
- 合計： /100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

主要敬語の基本訳。

Q1. 現代語訳せよ。

帝、御文書か**せたまふ**。

答え：「帝が、お手紙をお書きになる」 **解説：**「せたまふ」二重敬語（尊敬）。

Q2. 現代語訳せよ。

御文を**奉る**。

答え：「お手紙を差し上げる」 **解説**：「奉る」謙譲。「差し上げる」。

Q3. 現代語訳せよ。

「これは尊し」と**申す**。

答え：「『これは尊い』と申し上げる」 **解説**：「申す」謙譲。「申し上げる」。

Q4. 現代語訳せよ。

我も参り**侍り**。

答え：「私も参上いたします」 **解説**：「侍り」は動詞（参る）に付く丁寧の補助動詞で「～ます」（本動詞なら「あります・おります・ございます」）。「参る」は謙譲「参上する」。

Q5. 現代語訳せよ。

中宮、御文を**御覧ず**。

答え：「中宮が、お手紙をご覧になる」 **解説**：「御覧ず」尊敬。「ご覧になる」。

Q6. 現代語訳せよ。

御所に**参る**。

答え：「御所に参上する」 **解説**：「参る」謙譲。「参上する」。

Q7. 現代語訳せよ。

法皇、山里に**おはす**。

答え：「法皇が、山里にいらっしゃる」 **解説**：「おはす」は「あり・をり」の尊敬語で「いらっしゃる」（「行く・来」の尊敬にも使う）。

Q8. 現代語訳せよ。

君に仕うまつる。

答え：「君にお仕えする（お仕え申し上げる）」 解説：「仕うまつる」謙譲。

Q9. 現代語訳せよ。

上、仰せらる。

答え：「上が、おっしゃる」 解説：「仰す」＋「らる」（尊敬）。二重敬語。

Q10. 現代語訳せよ。

大納言、御前に候ふ。

答え：「大納言が、御前にお仕えしている（お控えしている）」 解説：「候ふ」は地の文の本動詞で謙譲（貴人のそばに「いる」意＝お仕えする・お控えする）。丁寧語の「候ふ」（～ございます・～ます）とは違う。

Q11. 現代語訳せよ。

帝、御物の怪に苦しませたまふ。

答え：「帝が、物の怪にお苦しみになる」 解説：「せたまふ」二重敬語（尊敬）。

Q12. 現代語訳せよ。

中將、御前よりまかる。

答え：「中將が、御前から退出する」 解説：「まかる」は謙譲で「退出する」（貴人のもとから下がる）。「御前より」とあるので、御前から下がる意。「参上する」と訳すのは「参る」「まうづ」。

Q13. 現代語訳せよ。

院、大殿籠る。

答え：「院が、お休みになる」 解説：「大殿籠る」尊敬の特殊形（寝る）。

Q14. 現代語訳せよ。

御物を賜ふ（下二段）。

答え：「御物をいただく」 解説：「賜ふ」下二段は謙譲。「いただく」。

Q15. 現代語訳せよ。

「いま参り候ふ」と申す。

答え：「『いま参上いたします』と申し上げる」 解説：「候ふ」丁寧＋「申す」謙譲。

Q16. 現代語訳せよ。

中宮、御文書か~~せたまふ~~を、人にも見せ~~させたまふ~~。

答え：「中宮が、お手紙をお書きになったのを、人にもお見せになる」 解説：「書かせたまふ」は四段「書く」の未然形＋尊敬「す」＋尊敬「たまふ」、「見せさせたまふ」は下二段「見す」（見せる）の未然形＋尊敬「さす」＋尊敬「たまふ」。どちらも二重敬語（最高敬語）で中宮への敬意。「を」は「～のを」。「人に」は見せる相手で、「させ」（使役）でさせられる人ではない。

Q17. 現代語訳せよ。

帝、御文を中宮に御覧ぜ~~させたまふ~~。

答え：「帝が、お手紙を中宮にお見せになる」 解説：「御覧ぜ」（「見る」の尊敬語「御覧ず」の未然形。見る中宮への敬意）＋使役「さす」の連用形「させ」＋尊敬「たまふ」（帝への敬意）。「中宮に」と見させる相手があるので「させ」は使役で、「中宮にご覧にならせなさる」＝「お見せになる」。「御覧ぜさす」は「（貴人に）お見せする・ご覧に入れる」の意で使うのがふつう。

Q18. 現代語訳せよ。

「日高くなり侍りぬ。はや起き~~させたまへ~~」

答え：「『日が高くなりました。早くお起きください』」 解説：上二段「起く」の未然形「起き」＋尊敬「さす」の連用形「させ」＋尊敬「たまふ」の命令形「たまへ」（二重敬語の命令）。起きるのは話しかけている相手自身で、させられる人はいないので「させ」は尊敬。命令形なので「お～ください」と訳す。

Q19. 現代語訳せよ。

御供仕うまつり**侍り**。

答え：「お供申し上げております／お供させていただいております」 **解説**：「仕うまつる」謙讓＋「侍り」丁寧。

Q20. 現代語訳せよ。

法皇、御使ひを**遣はす**。

答え：「法皇が、御使いを派遣なさる」 **解説**：「遣はす」尊敬の特殊形。

基礎編 / 20

【第2部】標準編（Q21～Q50）

両用語・複合敬語・特殊敬語。

Q21. 現代語訳せよ。

帝、御酒を**参る**。

答え：「帝が、お酒を召し上がる」 **解説**：「参る」は飲食では尊敬「召し上がる」。両用注意。

Q22. 現代語訳せよ。

上、御衣を**奉る**。

答え：「上が、お召し物をお召しになる」 **解説**：「奉る」は衣服では尊敬「お召しになる」。

Q23. 現代語訳せよ。

中将、御琴をいとおもしろく弾き**給ふ**。

答え：「中将が、お琴をたいそう趣深くお弾きになる」 **解説**：「給ふ」四段＝尊敬「～なさる／お～になる」。「おもしろし」は「趣がある」。

Q24. 現代語訳せよ。(会話文)

「我もさなむ思ひたまふる」

答え：「私もそのように思っております」 **解説：**「たまふる」は下二段「給ふ」の連体形（係助詞「なむ」の結び）。会話文（または手紙）で、話し手自身の「思ふ・見る・聞く・知る」などに付く謙譲の補助動詞で、「～ております／～ます」と訳するのが定番。動作の対象を高めるよりも、聞き手に対する丁重さを表す。

Q25. 現代語訳せよ。

殿、御文を賜ふ（四段）。

答え：「殿が、お手紙をお与えになる（くださる）」 **解説：**「賜ふ」四段＝尊敬「お与えになる／くださる」。

Q26. 現代語訳せよ。

中將、帝より禄を賜はる。

答え：「中將が、帝からほうびをいただく」 **解説：**「賜はる」は「受く・もらふ」の謙譲語で「いただく」（与えてくださる帝への敬意）。四段活用（たまはら・たまはり・たまはる…）。「禄」はほうび。

Q27. 現代語訳せよ。

帝、御覧じて仰せらる。

答え：「帝が、ご覧になっておっしゃる」 **解説：**「御覧ず」（尊敬）＋「仰せらる」（尊敬二重）。

Q28. 現代語訳せよ。

大臣、帝に御馬を奉らむとす。

答え：「大臣が、帝にお馬を差し上げようとする」 **解説：**「奉る」は「与ふ」の謙譲語で「差し上げる」。受け取る帝への敬意。

Q29. 現代語訳せよ。

「いまはまかり出で侍りなむ」

答え：「今はもう退出いたしましょう」 解説：「まかり出づ」謙譲（退出する）の連用形＋丁寧「侍り」（～ます）＋強意「ぬ」の未然形「な」＋意志「む」。「いまは」は「今はもう」。

Q30. 現代語訳せよ。

御前にさぶらふ人々、皆寝入りぬ。

答え：「御前にお仕えしている（お控えている）人々は、皆寝入ってしまった」 解説：「さぶらふ」（候ふ）は地の文の謙譲の本動詞で「（貴人のそばに）お仕えする・お控える」。

Q31. 現代語訳せよ。

中宮、御物語をいと愛でさせたまふ。

答え：「中宮が、物語をたいそうおほめになる／お賞美になる」 解説：「させたまふ」二重敬語。

Q32. 現代語訳せよ。

君も、今宵の月を御覧ずらむ。

答え：「あなたも、今夜の月を（今ごろ）ご覧になっているだろう」 解説：「御覧ず」は「見る」の尊敬語（サ変）。終止形「御覧ず」＋現在推量「らむ」。「今ごろ～ているだろう」の意味は現在推量の「らむ」が表す。

Q33. 現代語訳せよ。

「承り侍りぬ」と申す。

答え：「『承りました（お受けいたしました）』と申し上げる」 解説：「承る」謙譲（受ける）＋「侍り」丁寧＋「申す」謙譲。

Q34. 現代語訳せよ。

院、かの僧の事を聞こしめしけり。

答え：「院が、あの僧のことをお聞きになった」 解説：「聞こしめす」 尊敬（聞くの尊敬）。

Q35. 現代語訳せよ。

我、御前に御文を聞こえつ。

答え：「私は、御前（あの方）にお手紙を差し上げた」 解説：「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語（申し上げる）。手紙を送る意で使うときは「（お手紙を）差し上げる」と訳す。「つ」は完了。

Q36. 現代語訳せよ。

「これ、御覧じ候へ」

答え：「『これ、ご覧くださいませ』」 解説：「御覧ず」 尊敬＋「候へ」 丁寧の命令形。

Q37. 現代語訳せよ。

帝、蔵人を御前に召す。

答え：「帝が、蔵人を御前にお呼びになる」 解説：「召す」は「呼ぶ」の尊敬語で「お呼びになる」（ほかに「取り寄せる」「着る」「食ふ・飲む」「乗る」の尊敬にも使う）。

Q38. 現代語訳せよ。

「殿は今、御寝なる」

答え：「殿は今、お休みになっている」 解説：「御寝なる」 尊敬（お休みになる）。「大殿籠る」と同義。

Q39. 現代語訳せよ。

上、御歌をあそばす。

答え：「帝が、お歌をお詠みになる」 解説：「あそばす」は「す」の尊敬語で「なさる」。詩歌・管弦など高貴な人の動作に使い、歌なら「お詠みになる」。

Q40. 現代語訳せよ。

中宮、女房に御髪を**けづらせたまふ**。

答え：「中宮が、女房に御髪をとかせなさる」 **解説**：「けづら」は四段「けづる」（髪をとかす）の未然形。「女房に」と、させられる人があるので「せ」は使役、「たまふ」は尊敬（中宮への敬意）。「～させなさる」と訳す。

Q41. 現代語訳せよ。

「君のおほせのこと、**承りて侍り**」

答え：「『あなた様のおおせのことは、承っております（お受けしております）』」 **解説**：「承る」謙譲＋「侍り」丁寧。

Q42. 現代語訳せよ。

帝、御物の怪に**悩みたまふ**を、皇后いと心苦しと思しめす。

答え：「帝が、物の怪にお悩みになるのを、皇后はたいそうお気の毒だと思ひになる」 **解説**：「たまふ」尊敬＋「思しめす」尊敬（「思ふ」の尊敬）。

Q43. 現代語訳せよ。

御使ひ、御物を**奉りて**、退き出づ。

答え：「お使いが、お品を差し上げて、退出する」 **解説**：「奉る」謙譲＋「て」接続。

Q44. 現代語訳せよ。（会話文）

「我、君のために**仕うまつり侍らばや**」

答え：「『私が、君のためにお仕えしたいものでございます』」 **解説**：「仕うまつる」謙譲＋「侍り」丁寧＋「ばや」（願望）。

Q45. 現代語訳せよ。

大納言、いとたけ高く**おはす**。

答え：「大納言は、たいそう背がお高くいらっしゃる」 **解説：**「おはす」 尊敬（あり・いるの尊敬）。

Q46. 現代語訳せよ。

上、雪を御覧じて、「いとをかし」とのたまふ。

答え：「帝が、雪をご覧になって、『たいそう趣がある』とおっしゃる」 **解説：**「御覧ず」は「見る」の尊敬語。「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」。

Q47. 現代語訳せよ。

「我が宿にまかりたりしに、人もなし」

答え：「『私の家に下って（退出して）行ったところ、人もいなかった』」 **解説：**「まかる」は謙譲で「退出する」（宮中など貴人のもとから下がって、自分の家などへ行く）。「たり」は完了、「し」は過去「き」の連体形。

Q48. 現代語訳せよ。

中宮、白き御衣を召したり。

答え：「中宮は、白いお召し物をお召しになっている」 **解説：**「召す」は「着る」の尊敬語で「お召しになる」（ほかに「呼ぶ」「取り寄せる」「食ふ・飲む」「乗る」の尊敬にも使う）。「たり」は存続（～ている）。

Q49. 現代語訳せよ。

院、御物を賜はせたまふ。

答え：「院が、御品をお与えになる（くださる）」 **解説：**「賜はす」（賜ふ＋す尊敬）＋「たまふ」 尊敬。最高敬語の重ね。

Q50. 現代語訳せよ。

「畏まり侍り」と申す。

答え：「『かしこまりました』と申し上げる」 **解説：**「畏まる」（恐縮する）＋「侍り」丁寧＋「申す」謙譲。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

複合・係り結び・物語表現。

Q51. 現代語訳せよ。

帝、御琴を**あそばす**を、中宮、御簾の内にて**聞こしめす**。

答え：「帝が、お琴をお弾きになるのを、中宮が、御簾の内でお聞きになる」 **解説**：「あそばす」「聞こしめす」両方尊敬。

Q52. 現代語訳せよ。

「**承り**侍りて、いとうれしくこそ思ひ**たまふれ**」

答え：「『承りまして、たいそううれしく思っております』」 **解説**：「承る」謙譲（お受けする・うかがう）＋「侍り」丁寧（～ます）。「たまふれ」は下二段「給ふ」の已然形（係助詞「こそ」の結び）で、会話文で話し手自身の「思ふ」に付く謙譲の補助動詞。「～ております」と訳す。

Q53. 現代語訳せよ。

御使ひ、**まうで**て、御文を**奉る**。

答え：「お使いが、参上して、お手紙を差し上げる」 **解説**：「まうづ」は「行く・来」の謙譲語で「参上する」（連用形「まうで」）。「奉る」は謙譲「差し上げる」。

Q54. 現代語訳せよ。

上、若宮をいみじうかなしと**思しめす**。

答え：「帝は、若宮をたいそういとしいとお思いになる」 **解説**：「思しめす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」（「思す」より敬意が高い）。「かなし」は「いとしい」。

Q55. 現代語訳せよ。

「この絵、宮に御覽ぜさせたまへ」

答え：『この絵を、宮にお見せください』 **解説：**「御覽ぜ」（「見る」の尊敬語「御覽ず」の未然形。見る宮への敬意）＋使役「さす」の連用形「させ」＋尊敬「たまふ」の命令形「たまへ」（話しかけている相手への敬意）。「宮に」と見させる相手があるので「させ」は使役で、「お見せください」と訳す（「ご覧ください」ではない）。

Q56. 現代語訳せよ。

大納言、中宮に御琴を奉りたまふ。

答え：「大納言が、中宮にお琴を差し上げなさる」 **解説：**「奉り」は謙譲「差し上げる」で、受け取る中宮への敬意。「たまふ」は尊敬の補助動詞で、動作をする大納言への敬意。一つの動作に二人への敬意が入る（二方面の敬語）。

Q57. 現代語訳せよ。

「我も参り候はむ」

答え：『私も参上いたしましょう』 **解説：**「参る」謙譲＋「候は」（候ふ未然）丁寧＋「む」推量・意志。

Q58. 現代語訳せよ。

帝、もの思はしげにおはましけり。

答え：「帝は、物思いに沈んでいる様子でいらっしやった」 **解説：**「おはします」は「あり」の尊敬語で「いらっしやる」（「おはす」より敬意が高い）。ここは形容動詞「もの思はしげなり」の連用形に付く補助動詞で、「～（様子）でいらっしやる」。

Q59. 現代語訳せよ。

中宮、ものもおほせられず。

答え：「中宮は、ものもおっしゃらない」 **解説：**「仰せらる」二重尊敬＋打消「ず」。

Q60. 現代語訳せよ。

御使ひ、まかり帰りぬ。

答え：「お使いが、退出して帰ってしまった」 解説：「まかる」謙譲（退出）＋完了「ぬ」。

Q61. 現代語訳せよ。

「院は、いま御寝にて侍り」

答え：「『院は、いまお休みでございます』」 解説：「御寝」は「寝ること」の尊敬語（お休み）。「にて侍り」は「～でございます」で、「侍り」は丁寧（聞き手への敬意）。

Q62. 現代語訳せよ。

帝、御琵琶を召して、あそばす。

答え：「帝が、琵琶をお取り寄せになって、お弾きになる」 解説：「召す」尊敬（取り寄せる）＋「あそばす」尊敬。

Q63. 現代語訳せよ。

上、いと心細く思しめすを、女房ども、とかく慰め奉る。

答え：「帝がたいそう心細く思いになるのを、女房たちがあれこれとお慰め申し上げる」 解説：「思しめす」は「思ふ」の尊敬語で、帝への敬意。「慰め奉る」の「奉る」は謙譲の補助動詞で「お～申し上げる」（慰められる帝への敬意）。

Q64. 現代語訳せよ。

帝、若宮の御顔を御覧じて、笑ませたまふ。

答え：「帝が、若宮のお顔をご覧になって、ほほえみなさる」 解説：「御覧ず」は「見る」の尊敬語。「笑ませたまふ」は四段「笑む」（ほほえむ）の未然形＋尊敬「す」＋尊敬「たまふ」の二重敬語（帝への最高敬語）。

Q65. 現代語訳せよ。（会話文）

「さる人をなむ、昔見たまへし」

答え：『『そのような人を、以前見たことがございます』』 **解説：**「たまへ」は下二段「給ふ」の連用形（四段なら「たまひ」になる）。会話文で、話し手自身の「見る」に付く謙譲の補助動詞で、「～ております・～ました」などと丁重に訳す。「し」は過去「き」の連体形（係助詞「なむ」の結び）。

Q66. 現代語訳せよ。

院、御文を遣はす。

答え：「院が、お手紙をお送りになる（お遣わしになる）」 **解説：**「遣はす」は「遣る」（送る）の尊敬語で「お送りになる・お遣わしになる」。

Q67. 現代語訳せよ。

中納言、御前にさぶらひて、御物語申す。

答え：「中納言が、御前にお控えして、お話を申し上げる」 **解説：**「さぶらふ」は謙譲の本動詞で「お仕えする・お控えする」。「申す」は「言ふ」の謙譲語で「申し上げる」。どちらも、御前の貴人（帝など）への敬意。

Q68. 現代語訳せよ。

「いとかしこき御方なれば、畏まり侍り」

答え：『『たいそう恐れ多いお方なので、かしこまっております』』 **解説：**「畏まる」は「恐縮する」（敬語動詞ではない）。「侍り」は動詞に付く丁寧の補助動詞（～ます）。

Q69. 現代語訳せよ。

中宮、この歌を御覧じて、いみじく愛でたまふ。

答え：「中宮が、この歌をご覧になって、たいそうおほめになる」 **解説：**「御覧ず」尊敬＋「たまふ」尊敬補助。

Q70. 現代語訳せよ。

「まうで来つ。仕うまつるべきこと侍らば」

答え：『参上いたしました。お仕え申し上げるべきことがございましたら…』 **解説：**「もうで来」は「来」の謙讓語で「参上する」。「仕うまつる」は謙讓「お仕えする」。「侍ら」は「あり」の丁寧語「侍り」の未然形で、「～ば」と合わせて「ございましたら」（仮定）。

Q71. 現代語訳せよ。

中宮、上の御ために、僧どもに御祈りせ**させたまふ**。

答え：「中宮が、帝のために、僧たちにご祈祷をさせなさる」 **解説：**「御祈りせ」はサ変「御祈りする」の未然形。「僧どもに」と、させられる人があるので「させ」は使役、「たまふ」は尊敬（中宮への敬意）。「～させなさる」と訳す。

Q72. 現代語訳せよ。

「御覧**ぜさせ奉らばや**」

答え：『（あの方に）お見せ申し上げたい（ご覧に入りたい）ものだ』 **解説：**「御覧ぜ」（「見る」の尊敬語「御覧ず」の未然形。見る相手への敬意）＋使役「さす」の連用形「させ」＋謙讓の補助動詞「奉る」の未然形「奉ら」＋自己の願望「ばや」。「ご覧にならせ申し上げたい」＝「お見せ申し上げたい・ご覧に入りたい」。

Q73. 現代語訳せよ。

帝、かしこく御心を**動かしたまふ**。

答え：「帝は、たいそうお心をお動かしになる」 **解説：**「たまふ」尊敬（補助動詞）。

Q74. 現代語訳せよ。

「御物を賜はり侍りぬ」

答え：『御品をいただきました』 **解説：**「賜はる」（受身的謙讓）＋「侍り」丁寧。

Q75. 現代語訳せよ。

御乳母、若君を**抱き奉りて、まかり出づ**。

答え：「お乳母が、若君をお抱き申し上げて、退出する」 **解説：**「奉る」謙讓（補助動詞）＋「まかり出づ」謙讓。

Q76. 現代語訳せよ。

中宮の、御簾のうちに**仰せらるる**御声、ほのかにて**聞こえず**。

答え：「中宮が御簾の内でおっしゃるお声は、かすかで聞こえない」 **解説：**「仰せらるる」は「仰す」＋尊敬「らる」の連体形（二重敬語）で、下の「御声」に続く。「聞こえ」は一般動詞「聞こゆ」（＝聞こえる）の未然形＋打消「ず」。主語が「御声」なので、謙譲の「聞こゆ」（＝申し上げる）ではない。

Q77. 現代語訳せよ。

「さやうに**仕うまつる**べきやうにても**侍らず**」

答え：「『そのようにいたすべきわけでもございません』」 **解説：**「仕うまつる」は「仕ふ」の謙譲（お仕えする）のほか、「す」の謙譲（いたす・して差し上げる）にも使う。ここは「さやうに（そのように）」を受けるので「いたす」。「侍ら」は丁寧「侍り」の未然形で、打消「ず」と合わせて「ございません」。

Q78. 現代語訳せよ。

帝、御粥を少し**召して**、夜の御殿に**入らせたまふ**。

答え：「帝が、おかゆを少し召し上がって、ご寝所にお入りになる」 **解説：**「召す」は「食ふ」の尊敬語。「入らせたまふ」は四段「入る」の未然形＋尊敬「す」＋尊敬「たまふ」。させられる人がいないので「せ」は尊敬。

Q79. 現代語訳せよ。

院、御衣を**奉りて**、御所より**出でさせたまふ**。

答え：「院が、お召し物をお召しになって、御所からお出かけになる」 **解説：**「奉る」（衣服）尊敬＋「させたまふ」二重尊敬。

Q80. 現代語訳せよ。

「**まかり侍りて**、**承り**たることを**申し侍らむ**」

答え：「『退出いたしまして、承ったことを申し上げます』」 **解説：**「まかる」謙譲＋「侍り」丁寧＋「承る」謙譲＋「申す」謙譲。

【第4部】入試レベル (Q81~Q100)

源氏物語・枕草子など難関大頻出箇所。

Q81. 現代語訳せよ。(源氏物語・桐壺)

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひたまひける中に…

答え：「どの帝の御代であったか、女御や更衣が多くお仕えしていらっしやった中に」 **解説：**「候ふ」謙讓＋「たまふ」尊敬。

Q82. 現代語訳せよ。(源氏物語・桐壺)

いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

答え：「それほど高貴な身分ではない方で、格別に帝のご寵愛を受けていらっしやる方がいた」 **解説：**「たまふ」尊敬。

Q83. 現代語訳せよ。(源氏物語・桐壺)

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。

答え：「初めから自分こそはと自負していらっしやるお方々は、(桐壺更衣を) 目障りなものに見下し嫉妬なさる」 **解説：**「たまへる」「たまふ」尊敬補助動詞。

Q84. 現代語訳せよ。(枕草子・第一段)

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛び違ひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

答え：「夏は夜 (がよい)。月のころは言うまでもない。闇 (の夜) もやはり、蛍がたくさん飛び交っている (のがよい)。また、ほんの一つ二つなどが、ほのかに光って飛んでいくのも趣がある。雨などが降るのも趣がある」 **解説：**枕草子の冒頭は、作者が感じたことを書いた地の文で、敬語を含まない。敬語がないので、訳にも「お〜になる」「〜申し上げる」などを入れない (敬語があるかを見分ける練習)。「をかし」は「趣がある」。

Q85. 現代語訳せよ。(枕草子・香炉峰の雪)

「少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ」と**仰せらるれば**、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、**笑はせたまふ**。

答え：『少納言よ、香炉峰の雪はどうだろう』とおっしゃるので、御格子を上げさせて、御簾を高く上げると、(中宮が) お笑いになる」 **解説：**「仰せらる」 尊敬二重+「笑はせたまふ」 尊敬二重。

Q86. 現代語訳せよ。(源氏物語・若紫)

「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠の内に込めたりつるものを」とて、いと口惜しと**思へり**。

答え：『雀の子を犬君が逃がしてしまったの。伏籠の中に閉じ込めておいたのに』と言って、たいそう残念だと思っている」 **解説：**若紫(のちの紫の上)の言葉と、それを語る地の文。この場面の若紫には敬語が使われていない(「思へり」は「思ふ」+存続「り」で、尊敬語の「思す」ではない)。敬語がないので、訳にも入れない。

Q87. 現代語訳せよ。(伊勢物語・東下り)

「これなむ都鳥」と**言ふ**を聞きて、…と詠めりければ、舟こぞりて泣き**にけり**。

答え：『これが都鳥だ』と(渡守が)言うのを聞いて、…と詠んだので、舟中こぞって泣いてしまった」 **解説：**敬語を含まない地の文。

Q88. 現代語訳せよ。(土佐日記)

男も**すなる**日記といふものを、女もしてみむとて、**するなり**。

答え：「男も書くという日記というものを、女(の私)も書いてみようと思って、書くのである」 **解説：**土佐日記の冒頭。作者(紀貫之)が女性の書き手という形で書いた文で、敬う相手が出てこない所以敬語はない(「す」はふつうの動詞で、ここでは「(日記を)書く」)。訳にも敬語を入れない。「すなる」の「なる」は伝聞(～という)、「するなり」の「なり」は断定。

Q89. 現代語訳せよ。(大鏡)

次の帝、花山院天皇と**申し**き。…永観二年八月二十八日、位につか**せたまふ**。御年十七。

答え：「次の帝は、花山院天皇と申し上げた。…永観二年八月二十八日に、ご即位なさる。御年十七歳(であった)」 **解説：**大鏡(花山院)の書き出し。「申し」は「言ふ」の謙譲語で、そう呼ばれる

帝への敬意。「つかせたまふ」は四段「つく」の未然形＋尊敬「す」＋尊敬「たまふ」の二重敬語（最高敬語）で、帝への敬意。位につくのは帝自身で、させられる人はいないので「せ」は尊敬。

Q90. 現代語訳せよ。

入道殿、このことをいとねたく**思しめし**けり。

答え：「入道殿は、このことをたいそう悔しくお思いになった」 **解説：**「思しめす」尊敬（思うの尊敬）。

Q91. 現代語訳せよ。（源氏物語・桐壺）

上達部、上人なども、あいなく目をそばめつつ、「いとまばゆき人の**御おぼえ**なり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれ」と、…もてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき**御心ばへ**のたぐひなきを頼みにてまじらひ**たまふ**。

答え：「上達部や殿上人なども、なんとなく目をそらしながら、『たいそう見ていられないほどの（更衣への帝の）ご寵愛ぶりだ。唐土（中国）でも、こうしたことが原因で、世の中も乱れ、悪くなったのだ』と、…悩みの種になって、楊貴妃の例も引き合いに出されそうになっていくので、（更衣は）いたたまれないことが多いけれど、（帝の）畏れ多いご愛情が比べるものもないのを頼りにして、宮仕えを続けていらっしゃる」 **解説：**「御おぼえ」の「御」は、更衣が帝から受けるご寵愛を敬う接頭語。「御心ばへ」は帝のお心づかい。上達部・上人の動作（目をそばむ）には敬語が使われていない。最後の「まじらひたまふ」の「たまふ」は尊敬の補助動詞で、宮仕えを続ける桐壺更衣への敬意。「もて」は接頭語。

Q92. 現代語訳せよ。（源氏物語・桐壺）

かしこき御蔭をば頼み**きこえ**ながら、おとしめ疵を求め**たまふ**人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし**たまふ**。

答え：「（桐壺更衣は、帝の）畏れ多いご庇護をおたのみ申し上げながらも、（更衣を）見下して欠点を探しなさる方々は多く、自分の身はか弱く頼りない様子で、（ご寵愛を受けたために）かえって気苦労の多い物思いをしていらっしゃる」 **解説：**「頼みきこえ」の「きこえ」は謙譲の補助動詞「きこゆ」（～申し上げる）で、頼りにされる帝への敬意。「求めたまふ」「したまふ」の「たまふ」は尊敬の補助動詞（四段）で、それぞれ動作をする方々（ほかの女御・更衣）と桐壺更衣への敬意。「ぞ…したまふ」は係り結び（連体形）。

Q93. 現代語訳せよ。

宮の御覧じつる絵を、女房、上に奉る。

答え：「宮がご覧になった絵を、女房が帝に差し上げる」 **解説：**「御覧じ」は「見る」の尊敬語「御覧ず」の連用形で、見る宮への敬意。「奉る」は「与ふ」の謙譲語で、受け取る上（帝）への敬意。同じ文の中でも、敬語ごとに敬う相手が違う。

Q94. 現代語訳せよ。(大鏡・道長)

下臈におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせたまひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣りたまひぬ。

答え：「(道長公は帥殿より) 官位が下でいらっしゃるが、(中関白殿は道長公を) 先に立て申し上げて、まず(道長公に) 射させ申し上げなされたところ、帥殿の当たり矢の数が(道長公より) もう二本負けてしまわれた」 **解説：**大鏡「弓争ひ」の一節。「おはしませ」は「あり」の尊敬語「おはします」の已然形(道長への敬意)。「立て奉り」の「奉り」は謙譲の補助動詞(～申し上げる、立てられる道長への敬意)。「射させ奉らせたまひ」は上一段「射る」の未然形「射」＋使役「さす」(道長に射させる)＋謙譲の補助動詞「奉る」(道長への敬意)＋尊敬「す」＋尊敬「たまふ」(二重敬語・動作をする中関白殿への敬意)。「劣りたまひ」の「たまひ」は尊敬の補助動詞(帥殿への敬意)。

Q95. 現代語訳せよ。(源氏物語・夕顔)

「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる」

答え：「『あの白く咲いている花を、夕顔と申します』」 **解説：**光源氏のひとりごとを聞いた隨身が、花の名を答えた言葉。「申し」は「言ふ」の謙譲語、「はべる」は丁寧の補助動詞(係助詞「なむ」の結びで連体形)。どちらも、話し手の隨身から聞き手の光源氏への敬意。

Q96. 現代語訳せよ。(源氏物語・夕顔)

「花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」と申す。

答え：「『花の名は人の名のように、このような粗末な垣根に咲いているのでございます』と申し上げる」 **解説：**Q95の続き。「はべり」は丁寧の補助動詞(～ます・～ございます)で、隨身から聞き手の光源氏への敬意(「なむ…ける」は係り結び)。地の文の「申す」は「言ふ」の謙譲語で、作者から、申し上げる相手の光源氏への敬意。

Q97. 現代語訳せよ。(徒然草・第五十二段)

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を**拝まざり**ければ、心**憂く**覚えて、**ある時**、思ひ立ちて、ただひとり、徒歩より**詣で**けり。

答え：「仁和寺にいた法師が、年を取るまで石清水（八幡宮）を参拝していなかったの、残念に思って、ある時、思い立って、ただ一人、徒歩で参詣した」 **解説：**「詣で」謙譲。

Q98. 現代語訳せよ。(更級日記)

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものの**あなる**を、いかで**見ばや**と思ひつつ、…

答え：「東国への道の果て（常陸の国）よりも、さらに奥の方（上総の国）で育った人（である私）は、どんなにか田舎じみていただろうに、どう思い始めたことなのか、世の中に物語というものがあるそうだが、それをなんとかして見たいと思ひ続けて、…」 **解説：**更級日記の冒頭。作者（菅原孝標女）が自分自身のことを書いた文なので、敬語は使われていない（「思ひ」も、尊敬語の「思す」ではなく、ふつうの「思ふ」）。訳にも敬語を入れない。「あなる」は「あるなる」（伝聞）、「見ばや」の「ばや」は自己の願望。

Q99. 現代語訳せよ。(平家物語・敦盛最期)

熊谷涙をおさへて**申し**けるは、「助け**まゐらせん**とは**存じ候へ**ども、味方の軍兵、雲霞のごとく**候ふ**。よも逃れ**させたまは**じ。…」

答え：「熊谷が涙をこらえて申し上げたことには、『お助け申し上げようとは存じますが、味方の軍勢が雲や霞のように（大勢）おります。まさかお逃げになることはできません。…』」 **解説：**熊谷直実が敦盛に言う場面。地の文の「申し」は「言ふ」の謙譲語（作者から敦盛への敬意）。「まゐらせ」は謙譲の補助動詞（～申し上げる）、「存じ」は「思ふ」の謙譲語「存ず」、「候へ」は丁寧の補助動詞「候ふ」の已然形（～ます）、「候ふ」は「あり」の丁寧語（おります）。「させたまは」は尊敬「さす」＋尊敬「たまふ」の二重敬語で、会話文では、天皇・皇族でなくても目上の相手（ここでは平家の公達の敦盛）に使うことがある。「じ」は打消推量。

Q100. 現代語訳せよ。(源氏物語・桐壺・冒頭の全体)

いづれの御時にか、女御、更衣あまた**候ひたまひ**ける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき**たまふ**ありけり。はじめより我はと思ひ上がり**たまへ**る御方々、めざましきものにおとしめそねみ**たまふ**。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝

夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤しくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに**思ほして**、人のそしりをもえ憚ら**せたまはず**、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

答え：「どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではないが、とりわけご寵愛を受けていらっしゃる方がいた。初めから自分こそはと自負していらっしゃるお方々は、目障りなものと見下し嫉妬なさる。同じ身分、それより下位の更衣たちは、なおさら穏やかではない。朝夕の宮仕えにつけても、人の心ばかりを掻き乱し、恨みを受けることが積もったせいであったのだろうか、たいそう病気がちになり、なんとなく心細げに実家に帰りがちなのを、いよいよ飽くことなく愛おしいものとお思いになって、人の非難をもおさし控えることができず、世の語り草にもなってしまうようなお扱いである」 **解説：**「候ひたまひける」は謙讓「さぶらふ」（帝にお仕えする。帝への敬意）＋尊敬「たまふ」（女御・更衣への敬意）。「時めきたまふ」「思ひ上がりたまへる」「おとしめそねみたまふ」の「たまふ」は尊敬の補助動詞。「思ほし」は「思ふ」の尊敬語「思ほす」で帝への敬意。「え憚らせたまはず」の「せたまは」は尊敬＋尊敬の二重敬語（帝への最高敬語）。敬語の向きを一つずつ確かめると、省かれた主語を補える。源氏物語冒頭・最頻出。

入試レベル編 / 20

採点振り返り

- 基礎（Q1～Q20）： / 20
- 標準（Q21～Q50）： / 30
- 応用（Q51～Q80）： / 30
- 入試レベル（Q81～Q100）： / 20
- 合計：** / 100

あとがき

敬語の訳し方の核心： - **尊敬**：お～になる／～なさる（動作主への敬意） - **謙讓**：お～する／～申し上げる（受け手への敬意） - **丁寧**：～です／～ます／～ございます（聞き手への敬意）

二重敬語は最高位の敬意。両用語（奉る・参る・賜ふ・給ふ）の文脈判別が難関。

古文現代語訳の **絶対必須スキル**。

著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太

